コミュニケーション能力の諸相
変移・共創・身体化

発行　2013年3月8日　初版1刷
定価　5800円＋税
編者　© 片岡邦好・池田佳子
発行者　松本 功
装丁者　渡部 文
印刷製本所　三美印刷株式会社
発行所　株式会社 ひつじ書房
〒112-0011 東京都文京区千石2-1-2 大和ビル2階
Tel.03-5319-4916 Fax.03-5319-4917
郵便振替 00120-8-142852
toiawase@hituzi.co.jp http://www.hituzi.co.jp

ISBN978-4-89476-611-2

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、
小社かお買上げ書店にておとりかえいたします。ご意見、ご感想など、
小社までお寄せ下されば幸いです。

第2章　ことばのバリエーションの「社会的意味」を伝達する能力

―地域社会の急速なグローバル化がもたらす土着イデオロギーに着目して

高野照司

【要旨】言語能力は可変的特性を持ち、その可変性と深く関わる「社会的次元」を言語能力の重要な構成要素として捉えなおすべきである。変異理論の近年の展開のなかで、この「社会的次元」を巡る議論が活発化している。言語運用上の揺れは、それを用いる話者の「社会的実践」と深く結びついており、特定の地域社会・社会集団・一個人にとっても重要な「社会的意味」を持つ。ことばのバリエーション研究における「伝達能力」とは、常に“揺れる”言語運用を通して、話者が他者へ何らかの社会的意味を投影する能力だと言える。

1.　言語知識(能力)の可変性

生成文法理論の登場以降、言語研究の対象は母語話者の持つ均質な「知識」とされ、それが「言語能力」を解明する鍵と考えられてきた。一方、言語知識から派生する「言語運用」(実際の発話)はというと全く質の異なる代物で、同じ母語話者といえども個人差が大きく、発話産出時の一過性の変数(言い間違い、記憶・集中力の衰え、文脈解釈のゆれなど)により極めて不安定で、言語能力の解明には適さない瑣末的な資料として研究の対象から除外されてきた(Chomsky 1965)。意志伝達の媒体としてのことば本来の役割や機能、伝達の主体である話者に関する社会的情報などの一切を考慮からはずし、母語話者であれば誰もが共有する(と仮定される)直観や内省を通して言語能力の解明を目指すわけである。

しかし、言語能力へのこうしたアプローチは、「言語能力」自体の限定的な解釈(Hymes 1974)、母語話者の知識や直観の均質性という前提への科学的反証(Labov 1972b)、規範意識に縛られた言語内省と実際の言語運用との質的・量的較差(Sankoff 1988, Wolfson et al. 1989)などを根拠に、言語運用の主体である話者の社会・文化的背景や心理面を分析により反映させた理論の構築を唱える言語学者たちによって批判の的となってきた。

本章で詳しく扱うことばのバリエーションに関する研究は、この後者の理論的スタンスを発展させるかたちで、日常生活における意思伝達の媒体として活用される言語をできるだけ自然なありのままの姿で捉えることにより、人間の言語能力の本質へ迫ろうという帰納的アプローチをとる。従来の範疇規則(categorical rules)と随意規則(optional rules)のみでは、言語運用上の漸次的「揺れ」は記述不可能だった。ことばのバリエーション研究では、分析対象となる変項(揺れ)を取り巻く言語構造内の条件(言語内的要因)、話者の社会的属性(言語外的要因)、そして言語運用が行われているコンテクスト(スタイル的要因)などから当該変項に影響力を持つと仮定される各種要因を「拘束要因」(constraints)としてリストアップし、拘束要因間の相対的影響力(当該変項産出・非産出への相対的貢献度)を言語運用データに基づいて導きだす仮説検証型のアプローチをとる。

これまでいくつかの研究によって実際の発話(言語運用)データで観察される「揺れ」が、言語知識のコアを成す言語普遍的な規則(つまり上記の言語内的要因)によって導かれる予測と合致することが経験的に立証されている。例えば、Guy(1991)は、アメリカ英語話者のインタビュー談話に観察される語末 t/d 消去の規則的な変異(単一形態素語彙[mist, pact]>不規則動詞過去形[left, told]>規則動詞過去形[missed, packed]の順に消去指数が低くなる)が、消去規則への複数回の適用を経た語彙派生プロセスの違いによって正確に予測されることを語彙音韻論の枠組みで立証した。また、同様の変異事象を扱った Guy & Boberg(1997)では、同類の音韻素性の連続を避ける言語普遍的な Obligatory Contour 法則に基づいた分析が提示され、語末の二音素連続のうち第一音素目と第二音素目(t/d)が共有する音韻素性数の

差(例えば、"mist"においては、/s/(/z//ʃ//ʒ/)は[+coronal][−sonorant]だが、/t/(/d/)は[−continuant]素性が追加されるなど)によって t/d の消去率が階層的に決定されることを経験的に立証し、実際の発話で観察される漸次的な消去率が言語普遍法則から裏付けられることを示した。これらの成果は、ある適格なアウトプットが複数の拘束要因間の力関係(ランク付け)によって決定されるとする「最適性理論」(Prince & Smolensky 1993)と共通の理論的基盤に立脚したものである。

言語知識(能力)は可変的特性を内在しており(inherent variability)、その可変性には一定のルールに基づいた秩序が存在する(Weinreich et al. 1968, Labov 1969)。自由変異を多く含み分析不可能だとして軽視されてきた言語運用上の揺れは、むしろ言語知識の固有要素として統合されるべきものであると言える(Cedergren & Sankoff 1974, Sankoff & Labov 1979, Guy 1980)。[1] バリエーション理論は、母語話者の言語知識(能力)の解明を目標に据えるという意味においては、1つの言語理論として、例えば生成文法理論などとそれほど大きな隔たりはない。しかしながら、バリエーション理論における「言語能力」とは、ことばから社会的情報が剥ぎ取られた実在ではなく、ことばの主体である話者やその運用を取り巻く様々な社会的・脈絡的情報に基づいてある特定規則を内在化させ、それを適切に(時に方略的に)使いこなすことのできる運用上の能力をも包括したよりダイナミックな概念だと言える。これまでの理論言語学が提唱してきた抽象的「言語能力」(langue)と実際的「言語運用」(parole)との深い溝を撤廃しようというこのようなアプローチは、言語理論全般の研磨にもつながる意義深い学術的試みであると言える。さらには、人間の(言語)能力というものが範疇的実在では必ずしもなく可変性を備えるとする主張は、言語学のみならず他領域(哲学、心理学など)での昨今の理論的進展と歩みを一にする極めて注目すべき動きだと言える(Chambers 2009: 35–7)。

2.　言語知識(能力)の社会的次元

言語知識に本来備わっている「秩序ある変異性」(Weinreich et al. 1968)は、言語知識(能力)自体が発達途上段階にある子供の母語(方言)習得の経年的調査からも明らかになっている。その一事例として、英国ニューキャッスル地方の方言で進行する変化とその地域に住む幼児の母語習得の経年的推移について考えてみよう(Foulkes 2005, Foulkes & Docherty 2006)。当該地域では語末にある子音［t］直前の気息化(例えば、図1 Kate［keɪt］では語末の［t］子音の直前に息が漏れる現象)が、近年、特に若い女性たちの間で広まってきていると言われる。

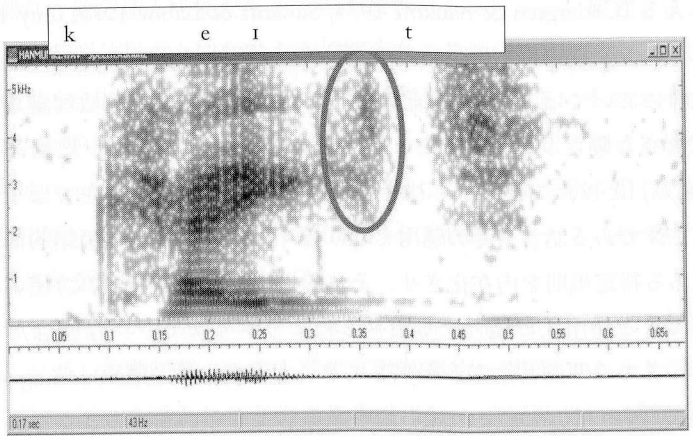

図1　Kiteにおける語末［t］直前の気息化のスペクトログラム(Foulkes 2005)

図2は、そのような新参の変化が、同じ地域に住み今まさに言語習得の渦中にある幼児たちによってどのように受け入れられているのか、その推移を経年的にまとめている。図2の縦軸は「語末［t］子音直前の気息化(pre-aspirated)の出現割合」、横軸は幼児の年齢(2; 6は2歳6カ月を意味する)を示す。グラフから明らかなように、言語習得の真っ直中にいる幼児たちは、3歳(3; 0)までは性別に関係なく、この極めて微細な音声特徴に敏感に反応

し積極的にそれを習得している。しかし、3歳以降、この音声特徴の習得に顕著な男女差が現れ始め、男児よりも女児の方がこの音声特徴をより高い率で習得していく様子が確認できる。当該発音に付随する「社会的情報」が言語知識(能力)に影響力を持ち始めたわけである。

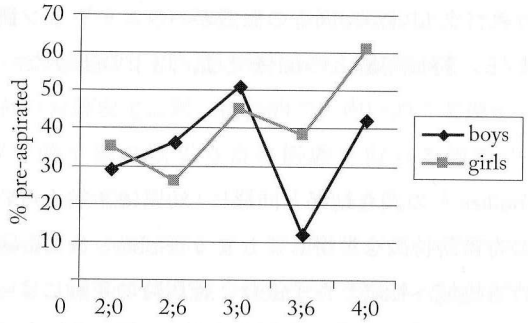

図2　英国ニューキャッスル地方方言における気息化の幼児による習得過程
(Foulkes & Docherty 2006: 424)

言語知識(能力)の「社会的次元」という観点からいくつかの重要な知見が得られる。第一に、幼児の言語習得(つまり、言語知識・能力の構築)は、当該言語の用いられている地域社会の特性や生活環境から切り離して考えられるべきものではない。即ち、幼児は自分が身を置く生活環境(ここではニューカッスル地方)で接する新参の変化をも含めた言語インプットに敏感に反応し、その時代や地元に固有の方言色豊かな言語体系を形作っていることが分かる。第二に、言語習得の渦中にある幼児たちは、言語インプットに付随する社会的情報をはぎとって純粋に言語記号のみを取り込みながら習得を行うわけではなく、その言語特徴が持つ「社会的意味」(ここでは、気息化を用いる話者の年齢や性別)を把握した上で言語習得を進めている。これは図2における男女差の出現(3歳以降)に関わることであり、幼児たちは成長とともに今習得している音声特徴(語末［t］子音直前の気息化)が年齢や性別の観点から自分が習得すべき特徴か否かをその社会的意味に照らして判断し、習得の道筋を自ら方向修正していると考えられる。日常生活のなかで頻繁に

接するこの特徴的な発音の主体(若い女性)を見極め、特に女児はその新種の変化を積極的に受け入れ、男児はどちらかといえば回避していくことで言語習得における性差という変異性が生ずるわけである。

母語(第一言語)習得や第二言語習得研究において、ある一定の年齢を過ぎると母語話者並みの言語知識(能力)を身に付けることが困難とする「臨海期仮説」が提唱されて久しいが、同等の仮説がバリエーション研究においても重要視されている。特に年齢との関係では、以下のような一般化が導かれる。

(1)　(上記 Foulkes らの調査結果と同様に)幼児は 3 歳くらいで育った環境に特有の方言的特徴を習得してしまう(Roberts & Labov 1995)。

(2)　異なる方言地域へ転居した子供は、転居時の年齢によって転居先の新しい方言体系の習得に差が生じる。8 ～ 9 歳ぐらいまでは比較的単純な特徴(例えば、母音の発音)ならば習得は可能だが(Payne 1980)、13 歳を過ぎてから転居した子供については、既存の方言体系を新しい体系にリセットすることはほぼ不可能である(Chambers 1992)。

また、ことばの主体である話者の社会生活も、母語習得(つまり、言語知識・能力の構築)には重要な影響力を持つ。

(3)　母語習得の初期の段階では親の役割が最も重要で、幼児は母親を中心とした介護者から与えられる比較的標準的な言語体系を習得していく。しかし、成長とともに人間関係の幅が広がり、学齢期以降は仲間からの影響が介護者のそれを上回りその地域の方言的特色を持つ言語体系の習得へと移行。12 歳くらいまでにはその体系化を完成する(Kerswill & Williams 2000)。

さらには、地域社会で進行しつつある言語変化への感受性も幼少時の話者の社会心理的な側面によって左右されることが明らかになっている。

(4)　(山形県最上地方の)若者層に見られる新方言的文法項目の使用においては、「地元志向で、自分の周囲の小集団への帰属意識が高く、活動的で新しい現象を受け入れやすい生徒(中学生)たち」がその中心的な担い手である(井上 1985: 245)とされる。

同様の考察は、イギリスのニュータウン(新興都市)で行われた同一話者の経年的調査(パネル調査)でも指摘されている。友達が多く社交的な子供ほどその地域に固有の言語変化に対し積極的で、内向的で友達が少ない子供ほど変化に対し保守的で親の話す方言の影響を留める傾向にあるとされる(Kerswill & Williams 2000)。

子供の方言習得とその経年的変化に着目した以上の研究成果から、我々の言語知識(能力)は、成長に伴う社会経験や社会網、言語の揺れそのものが投影する「社会的意味」、話者の社会心理面と密接に結びついていることが分かる。特に言語能力が発達途上的な段階にあってその影響力は大きく、幼児の言語能力に至っては社会化とともに漸次的な再構築も行われる。言語知識(能力)は、社会的に空虚な実在では決してありえない。

3.　バリエーションの「社会的意味」を伝える能力

ことばのバリエーション研究における近年の注目すべき展開として、可変的な言語知識(能力)に備わる「社会的次元」の解釈をめぐる議論の活性化が挙げられる。従来のバリエーション研究では、世代・社会階層・性別・人種／民族性など「話者属性」を画一的に定め個々の話者を自動的に特定の社会集団(例えば「労働者階層の白人中年男性」など)に振り分ける方法論が主流だった。しかし一方、所属しているはずの特定社会集団が示す揺れのパターンから逸脱する話者など「個人差」の意味をないがしろにし、バリエーションの実態を過度に単純化してしまうという弊害が指摘されていた。この流れを受け、研究対象となる言語共同体の内部格差(Milroy 1980)や話者一人一人の社会生活に目を向ける「質的」観点を従来の計量的分析に融合するアプ

ローチが唱えられてきた(Coates & Cameron 1988, Graddol & Swann 1989, Eckert & McConnell-Ginet 1992)。とりわけ、前節で紹介したニューキャッスル方言の「語末［t］子音直前の気息化」の事例が示すように、言語運用上の「揺れ」(変項)が当該言語共同体内でどのような「社会的意味」(social meaning)を持ち、どのような成員によって継承され、言語共同体全体に行き渡る変化に結びついていくのかが近年のバリエーション研究の焦点になっている(Milroy 2004, Eckert 2005)。こうしたアプローチは、ことばになぜ変異・変化が生ずるのかというバリエーション理論が解明すべき根本的難題("actuation riddle")(Weinreich et al. 1968: 186)への本格的な取り組みとして注目されている。

3.1 社会的カテゴリーをめぐる議論

ことばのバリエーション研究にエスノグラフィー的調査法を融合し、話者(被験者)一人一人の社会生活を長期的に観察した上で、バリエーションの社会的意味を探究した先駆的研究にEckert(1988, 1991, 2000)がある。ミシガン州デトロイト市郊外の高校での長期間の参与観察を経て、当時米国中西部の都市部で進行中であったNorthern Cities Chain Shiftと呼ばれる一連の母音変化の拡散のメカニズムとその「社会的動機づけ」を明らかにした。学校生活中心の保守的な価値観で日常生活を送る高校生集団(Jocks)と学校が求める価値観には背を向け地元のストリート文化に居場所を見出している高校生集団(Burnouts)とでは、当該変化(母音［ʌ］(but)を［ɔ］(coffee)や［ʊ］(book)などのように発音)への参与の仕方が異なっていた。Burnoutsはデトロイト市中心部から伝播するこの汚辱的変化に、屈強さや大都市ストリート文化との絆などの社会的価値を見出し、集団への帰属という社会的アイデンティティーの実践手段として積極的に当該変化を押し進めていた。一方Jocksは、Burnoutsとの弁別化および自分たちの独自性のアピールとして、異なる母音の異音(pen［ɛ］をpan［æ］のように発音)を積極的に使用していた。さらには、こうした生徒集団カラーに特有の変異パターンは、性別や(親の)社会階層といった大人の固定的な属性とは規則的な相関を示さないことも同時に立証された。社会階層などのような抽象的尺度ではなく、話者自らが構築するローカルな「社会的カテゴリー」がことばのバリエーションや変化を動機づける社会的要因として重要であることは、比較的均質な田舎町で暮らす高校生集団("Burnouts" vs. "Rednecks")においても繰り返し立証されている(Habick 1991)。

集団帰属意識やその集団への忠誠心はことばを用いる上で決定的な影響力を持ち、ことばのバリエーションに内在する秩序や規則性、ことばの変化の社会的動機づけを理解する上で極めて重要な社会心理的因子となる。「世代」「社会階層」「性別」と同様、話者属性としての「民族性」(ethnicity)についても、「静的な」ラベリング(例えば、「アフリカ系アメリカ人」)では問題が多い。これまで社会心理学など隣接分野の知見を融合し学際的アプローチをとるバリエーション研究の成果(Bell 1984, 2001, Giles & Coupland 1991など)から、ことばの使用(揺れ)を通して話者は特定の民族集団への忠誠心を対話相手に誇示したり(Rickford & McNair-Knox 1994)、自己または他者の民族的アイデンティティーを意図的かつ方略的に活用することが分かっている(Fought 2002, Rampton 1995)。一般に、ことばの使用を通して自己の社会的アイデンティティを構築するプロセスは流動的かつ刹那的であり、一人の話者がどの集団への帰属意識を顕在化させるかは、その話者が身を置く地域社会の特性、場面や状況、参与している意思伝達活動の中味、個人的イデオロギー、話者の意図や方略など、様々な社会脈絡的な要因によって決定づけられる(Gumperz 1982a, b)。社会的意味を探究するバリエーション研究における「民族性」という概念は、ことばを通して特定民族集団への帰属を他者に伝える社会的アイデンティティーの構築行為として質的観点からも洞察を加えるべきだと言える(Le Page & Tabouret-Keller 1985)。

以上のように、ことばのバリエーションや変化のメカニズムは、話者属性に基づいた画一的なカテゴリーによっては説明のつかない事例が多々あると同時に、より質的な洞察を経て個々の話者が日々の実生活の中で取り組んでいる「社会的実践」(social practice)と密接に結びついていることが分かってくる。このような動的カテゴリーに基づいてことばのバリエーションを捉え

直すことで、ある特定のバリエーションが持つ社会的意味やそれを伝えようとする話者の意図、その背景となる社会的動機づけの把握などがより容易になる。

3.2　ことばのスタイル差をめぐる議論

ことばのバリエーション研究において揺れを示す変項と「発話スタイル」との規則的相関は多くの言語共同体で確認されてきた１つの法則性である。同一の言語共同体に属する成員は皆それを言語知識(能力)の一部として獲得しており、その言語共同体に根付いている規範意識の顕れとしてことばの変化の起因や動向を知る重要な手がかりとなる(Labov 1972a)。一方、バリエーション研究の近年の展開の中で、発話スタイルが持つ発見的リソースとしての豊かさを指摘する研究が増えている(Biber & Finegan 1994, Eckert & Rickford 2001)。それらの研究は、インタビュー時の異なるタスク(ナラティブ・文章朗読・単語読み上げなど)や話題の堅苦しさなどにより生じるスタイル差という限定的な解釈から脱却し、話者の現実の生活の中でスタイル差がなぜ生じるのか、その社会的意味は何なのかなど質的な観点をスタイル差の理解に応用する。

バリエーションの社会的意味を探究するアプローチは、とりわけ発話スタイルの自立的・発信的役割に注目する。発話スタイルは方略的な側面を持ち、話者は会話のコンテキストに応じて多彩な「顔」(personae)を喚起させ、ある特定の社会的意味や相互作用的効果を創り上げる(Coupland 2001a)。英国ウェールズ地方で人気を博すBBCラジオのパーソナリティーは、談話の局面ごとにある特定の効果を狙った「パフォーマンス」として、ウェールズ地方南部に特有の英語発音(震え音的/r/や二重母音［ei］［ou］の長い単母音化)へのスタイルシフトを巧みに行うという(Coupland 2001b)。スタイルシフトにより前景化する「ウェールズ人らしさ」は、ラジオ聴衆にとって今進行している談話が陽気で滑稽な「フレーム」に移行する「コンテクスト化の合図(contextualization cue)」(Gumperz 1982a)の役割を果たしたり、聴衆との心的距離を縮める話者の「スタンス取り」としても活用され、一般論に対峙するような個人的見解に対する共感を得、説得力を持たせる効果に繋がるとされる。

スタイルが持つ異なる「顔」(社会的アイデンティティ)の喚起性は、声色の活用においても実証されている。Podesva (2006)は、ゲイとしての社会的アイデンティティを持つある男性医師の個人内変異(スタイル)を様々な生活場面(診療・父親との電話での会話・親友とのバーベキューパーティ)を通して観察した。その医師は、自分がゲイである(またはそうではない)という社会的意味を伝達する言語的リソースとして「裏声」(falsetto voice)を活用し、その使用は内集団的場面(バーベキューパーティ)において最も顕著で、様々な談話的機能(叫び・驚きや興奮・評価的コメント・他者の引用・聴衆の注目の維持など)を果たしながら、その場(舞台)の「プリマドンナ」(diva)としての顔の構築に貢献していた。

以上のことから、発話スタイルの真の理解やそのバリエーションの起因の解釈には、「堅苦しさ」や「カジュアルさ」といった発話状況や場面、発話タスクなどからの一方的な制約要件だけを考慮に入れるのでは不十分だと言える(Duranti & Goodwin 1992)。話者がその会話を「社会的営み」としてどのように捉え、いかなる会話参与者間関係を築こうとしているのかなどを含めた積極的な「話者の働きかけ」(speaker agency)に基づいた社会的意味の構築とその伝達行為という双方向的視点が不可欠となってくる。

3.3　社会的実践としてのことばのバリエーション

以上のように、従来は画一的に決定されていた話者の属性や発話の改まり度(スタイル)に基づく言語運用上のバリエーションは、個々の話者が日常的に行う「社会的実践」の反映であり、当該地域社会に根ざした個々の話者の生活経験やそれを通して形作られる社会的アイデンティティーなど様々な実生活要因が複合的に絡み合う動的な「社会構築概念」として捉え直されるべきものだと言える(Eckert & McConnell-Ginet 1992, Eckert & Rickford 2001)。日常生活の中で類似の社会文化活動・信条・価値観および言語運用を共有する地域住民(話者)たちは、日常の社会的実践を通して自発的に創造し、時に変

革していく自己実現の場(Community of Practice)を持ち、その中である特定のバリエーションは何らかの「社会的意味」を与えられ、当該集団または自己の社会的アイデンティティーの証として誇示・強化されていくことになる(Eckert 2000)。ことばのバリエーションとは、社会生活の様々な場面で話者により構築されているダイナミックな実在であり、その社会的意味を他者へ伝ようとする実践こそがことばのバリエーションを動機づける重要な要因の1つと捉えることができる。さらには、ある特定の社会的意味を持つバリエーションが、当該地域社会全体のなかでどのように埋め込まれ、伝播していくのかなどといった言語変化メカニズムの解明が今後のバリエーション研究における重要な課題となってくる。

4.　地域社会の急速なグローバル化とことばのバリエーション

本節では、筆者が北海道後志管内ニセコ町をフィールドに、2009年4月より継続的に行っている言語調査[2](以下、「ニセコ調査」と略す)から予備分析の成果を論じる。町の急激な「グローバル化」[3]に直面する住民(話者)が、その変化に対しどのような意識や態度で社会生活を送り、それらが現時点で観察されることばのバリエーションとどのような規則的関係を持つのかなど、特に話者たちの土着意識やアイデンティティーなど社会心理面に焦点を当てながら当該地域方言に見られるバリエーションの社会的意味の把握を試みる。

4.1　ニセコというフィールド

ニセコ町(総人口4,703人、2011年8月末現在)は、北海道西部の後志支庁管内に属し、羊蹄山(通称「蝦夷富士」)の西麓に広がる農業を主体とした町である(図3)。ニセコ町(昭和39年狩太町から町名を改称)の入植は、明治28年頃に始まったとされる。その形態は、自由入植ではなく、本州資本家の投資した農場や団体入植者によって開拓が進行した。入植者一世の出身地は様々で、東北地方各県(青森、岩手など)、茨城、埼玉、東京、石川、福井、熊本、徳島県などが挙げられる(ニセコ町百年史編さん委員会2002)。ニセコ町自体での言語調査は過去に一度も行われていない。[4]

図3　後志支庁管内ニセコ町

ニセコ町は、数多くの天然温泉、大型リゾートホテルやペンションなどが点在する全国的にも有名な観光地でもある。夏はハイキング・テニス・ラフティングなどアウトドアスポーツの楽しめる避暑地、冬は世界随一のパウダースノーを誇るスキーリゾートとして近年は世界的にも知られるようになった。かつて小泉政権が奨励したインバウンド(外客誘致)促進政策を発端に、ニセコ地区一帯(特に地元では「山」と呼ばれる倶知安町ひらふ地区)で外国人観光客が激増した(図4)。

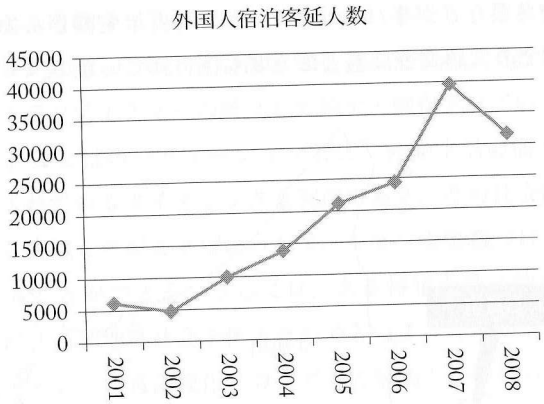

図４　ニセコ町における外国人宿泊客延人数の経年変化（ニセコ町 2009）

とりわけ 2004 年以降は、長期滞在型のリゾート地として特に豪州人の人気を集め、ニセコ町住民総人口（約 4,700 人）の少なくとも 10 倍近い外国人を毎年迎え入れるという日本国内では極めて特異な地域社会を形成するに至っている。ここ数年、円高の影響から豪州勢の来訪は減少傾向にあるが、それにとって代わりアジア諸国（香港・台湾・中国など）からの観光客の増加が目立ち、さらには外資系企業やアジア人富裕層による土地や不動産の売収も盛んに行われている。また、観光客来訪の傾向も従来の冬季集中型から夏季の避暑目的に移行し始め（ニセコ町 2009）、特に近年は、外国人の長期滞

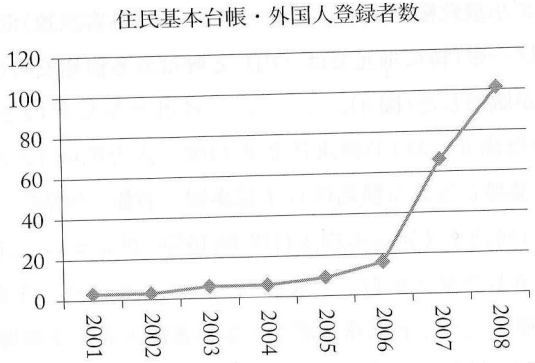

図５　ニセコ町外国人登録者数の経年比較（ニセコ町 2009）

在者（または定住者）が急増している（図 5）。

実際のところ、国内においてもニセコ町人気は、バブル経済崩壊後（平成 6 年以降）もほとんど衰えることはなく、長期滞在や定住を目的とした国内外からの転入者が着実に増加してきている（図 6）。2010 年国勢調査の結果を扱った新聞記事（北海道新聞 2011 年 2 月 15 日朝刊）によれば、2005 年以降 5 年間の人口推移において、長年過疎化に歯止めのかからない北海道内の市町村にあって、ニセコ町は道内第 3 位の増加率（3.4%、158 人）を示している。

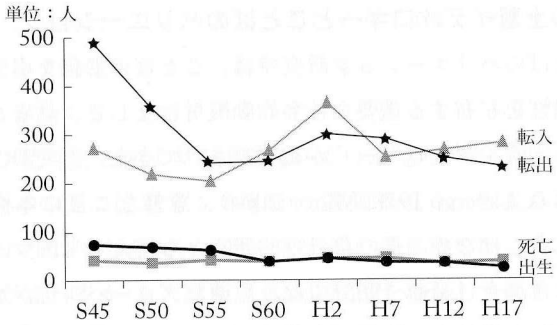

図６　ニセコ町人口の経年的動態（ニセコ町企画課 2007: 3）

4.2　グローバル化とローカリズムの復興

こうした国内外からの新資本の参入や大規模開発、それに伴う人口の急激な流入は、ニセコ町民にとってどのような意味を持つのだろうか。実際のところ、ニセコ町の自然環境や社会生活の変化は、地域産業の活性化や公共施設の整備などといったプラスの因子だけではなく、生活環境の劇的変化（例えば、日本一の地価高騰率・自然破壊）に対する住民の違和感や防御的反応、異文化受け入れ体制の不備や遅れから生ずる住民とゲスト間での摩擦や軋轢など、多くのマイナス因子を含む可能性が指摘されている（北海道貿易情報センター 2006）。

ことばの観点から考えるならば、今日地球規模で進行する「グローバル化」は、日本語においては外来語（特に英語）の爆発的増殖や地域方言のさら

なる共通語化など、地域文化の固有性や地域方言のバイタリティーを減退させる「均一化」現象と位置付けることができる。しかし同時に、グローバル化の進行は、共通語化とは相反する新方言の誕生（永瀬 1984，井上 1983，徳川・真田 1991，真田 2000）や民族方言の固持（Labov 1963, Meyerhoff & Niedzielski 2003）などの言語変容事例が示すように、話者の地元帰属意識やアイデンティティーの復興（ローカリズム）、それに依拠する地域方言のさらなる多様化など、地域の固有性を話者が志向する逆転イデオロギーの芽生えにも繋がると言える（Johnstone 2004）。

4.3　話者の土着イデオロギーとことばのバリエーション

長年、ことばのバリエーション研究では、ことばの変化を引き起こし、その変化の方向性を左右する重要な社会的動機付けとして、話者または言語共同体が持つ「土着イデオロギー」[5]が重要視されてきた一方で（Kroch & Small 1978, Sankoff & Laberge 1978, Milroy 2004）、意外なことに本格的な研究事例はそれほど多くはない。その草分け的研究とも言える米国マーサズ・ビンヤード島の方言調査（Labov 1963）では、急速なグローバル化が進む地域社会において、それと逆行する住民の土着イデオロギーが言語変化に与える影響が経験的に立証された。当時のマーサズ・ビンヤード島は、避暑地として人気があり、毎年、夏のバケーション期になると本土から裕福な長期滞在者が多数来島し、島の生活を大きく変えていた。島本来の生活が荒らされることへの住民の不満は、特に島の伝統的な生活を営む壮年期の漁民に顕著で、その不満の度合いと自然談話における二重母音 /ai/ と /au/ の「中舌化」（例えば、time［tai̯m］や house［hau̯s］の［a］部分を口をあまり大きく開けずに［ə］として発音する現象）の使用率には強い正の相関が確認された。また、比較的若い世代の島民であっても、将来、島に一生住み続けるか、本土へ渡って就職するかといった島への忠誠心や愛着の度合いによっても中舌化の程度が左右されていることも明らかになった。二重母音の中舌化には、島社会のグローバル化とは対峙するスタンスをとる島民が、島民としてのアイデンティティーを際立たせ、それを他所者へアピールするという「社会的意味」が付与されていた。島の生活変化への反発心や防衛反応が、中舌化を動機づける社会的要因として働いていたわけである。[6]

土着イデオロギーを明示的に話者に尋ね、言語運用との相関を実験的に検証した研究に Underwood（1988）がある。米国テキサス州出身者を被験者として、テキサスへの忠誠心を3つの質問（テキサス人に対して親しみを感じるか・会社で雇うとするとテキサス出身者を雇うか・テキサス出身者に投票するか）への回答を基に点数化し、テキサス英語に典型的とされる二重母音 /ai/ 母音の単母音化の使用率を当該母音を含んだ文章の読み上げ音声を基に計測した。2つの指数（テキサスへの忠誠心と単母音化）には明らかな正の相関が確認され、話者は「テキサス人」としてのアイデンティティーを当該発音の使用を通して顕在化させたと解釈できる。

日本国内においても、土着イデオロギーを変数として「言語使用意識」における揺れの規則性を検証する研究はいくつか見られる。真田（1988）は、西日本と東日本の間に位置する4地域（三重県桑名市・同長島町・愛知県名古屋市・同知立市）を対象に、一問一答方式の調査票を用いて、話者の帰属意識（西日本か東日本か）と言語使用意識の相関を検証した。その結果、東日本と西日本を分ける指標として知られる「シロクナル／シロナル」「カッタ／コータ」など複数の項目の使用（意識）において、自分の住む街をどちらに帰属させるか、自分を関西人（または、そうではない）と認識するかなど、話者の土着イデオロギーとの正の相関が確認された。また、京阪地域の大学生を対象にしたロング（1990）や北九州市の大学生を対象にした陣内（1996）では、アンケート調査を基にして異方言地域への移住に伴う土着イデオロギーの変容と言語使用意識の規則的相関が明らかになっている。両調査ともに、被験者が母方言や出身地に対して持つ誇りや肯定的評価が、移住先でも母方言を維持していく動機付けとなりうることが示されている。

4.4　調査の概要

本予備分析では、アンケート調査によるニセコ町民の方言使用意識およびインタビューデータを基に、上述の二律背反的なイデオロギー（グローバル

化とローカリズムの復興）の混在に注目し、当該方言の共時的バリエーションと個々の住民（話者）が抱く土着意識やアイデンティティーとの規則的関係を検証する。

4.4.1　調査協力者

2010年2月より開始したニセコ町でのフィールドワークは現在も継続中であるが、これまでニセコ町の生え抜き住民20名（男6，女14）から被験者としての協力を得ている（表1,2）。

表1　ニセコ調査　本予備分析における調査協力者の内訳

青年層（18～33）	男1　女4	計5
中年層（34～59）	男3　女6	計9
老年層（60～）	男2　女4	計6

表2　ニセコ調査　本予備分析における調査協力者の個別情報

話者ID	年齢	性別	職業
y-pos-16m	16	男	学生
y-pos-18f	18	女	学生
y-neg-20f	20	女	学生
y-neut-33f	33	女	専業主婦
y-neut-33f	33	女	専業主婦
m-neut-41f	41	女	パート職員・主婦
m-pos-45m	45	男	農業
m-neg-49m	49	男	農業
m-pos-50m	50	男	商店経営
m-neut-50f	50	女	商店経営
m-neg-53f	53	女	パート職員・主婦
m-neg-57f	57	女	農業
m-neut-58f	58	女	専業主婦
m-pos-59f	59	女	専業主婦
o-neut-62m	62	男	農業
o-neg-63m	63	男	無職
o-neg-66f	66	女	専業主婦
o-neut-71f	71	女	専業主婦
o-neg-75f	75	女	専業主婦
o-neg-77f	77	女	商店経営

（「話者ID」欄は、「年齢」－「土着イデオロギータイプ」－「年齢」－「性別」を意味する）

フィールドワークの初期段階では、公民館や町立図書館などの仲介を通して、ニセコ町の生え抜き住民を対象に調査協力の依頼をした。その後、調査が終了した協力者の友人・知人などを紹介してもらうなどの方式で調査を拡張していった。

4.4.2　データ収集

各協力者とのインタビューにおいては、調査タスクとして(1)～(4)を設定した。面接調査時の音声は、すべてデジタルレコーダー（Marantz PMD661）とラバリエマイク（audio-technica ATM14a）を用いて録音した。

(1)　話者属性に関する基本情報の収集：
　　話者の生育地・年齢・家族構成・親／祖父母・学歴・職業など

(2)　話者の社会生活に関する情報の収集：
　　趣味・特技・余暇の過ごし方・地域での社会活動・日常のコミュニケーション活動など

(3)　話者の日常語（vernacular）[7]の収集：
　　幼少時代、子供の頃よくした遊び、今も思い出に残る学校の先生・友人や出来事など

(4)　ニセコ地区の生活変化に対する個人的意見や感想の収集：
　　昔と今の街の変化、生活上の変化、外客誘致、外地人の流入、町が変化して良かった事・良くなかった事、これからの課題など

インタビュー終了後、北海道方言的語彙と文法の使用に関するアンケート

調査への回答を依頼した。筆者が2010年に行った北海道方言の実時間トレンド調査（高野2012, 2013）で使用したものを渡し、後日改めて回収に伺った。アンケートの回収率は100%であった。

上記（1）～（4）の各具体的話題は、インタビューの中でしばしば連動することが多かった。従って、すべての協力者において同じ話題の提示順序でインタビューを進行させたわけではなく、なるべく協力者主導の談話が収集できるよう心がけた。また、話者自身がある特定の話題から逸れ、上記以外の話題を差し挟むことも少なからずあったが、それも貴重な資料として録音した。

4.4.3　分析手順

アンケート調査による北海道方言的語彙・文法についての使用意識、インタビューによる自然談話（言語運用）、さらにはインタビュー内の特定の話題に対して話者が表明する意見や態度を基に「土着イデオロギー」とことばのバリエーションの関係を多角的に検証する。

具体的には、各協力者とのインタビュー内容から、それぞれの協力者を土着イデオロギーの持ち方によって下記A～Cのタイプに分け、方言使用意識上のバリエーションとの規則的関係を検証する。

A.　ニセコ地区の社会変化へ否定的・反対意見を持つ話者（表2話者ID欄参照：「年齢層 -neg- 年齢 - 性別」として表示）

B.　ニセコ地区の社会変化へ肯定的・前向きな意見を持つ話者（表2、「年齢層 -pos- 年齢 - 性別」として表示）

C.　社会変化へは中立的立場、またはどちらの立場もはっきりとは示さなかった話者（表2、「年齢層 -neut- 年齢 - 性別」として表示）

最後に、ニセコ地区の変化に対し否定的なスタンスを協力者20名の中で最も能弁に語った男性話者（表2，話者ID: m-neg-49m）を例にとり、インタビュー談話に観察される音声的バリエーションを土着イデオロギーとの関連で論じる。

4.5　分析結果（1）　ニセコにおける方言使用意識と世代差

北海道方言的語彙・文法に関するアンケート調査では、先行研究を参考に、語彙項目および文法項目をそれぞれA群・B群に分けた（表3）。A群は「古方言」や「中興方言」を含み（井上1983）、[8] 古くから認知されてきたが北海道方言全般の共通語化の進行とともに若い世代に向け廃れつつある項目、B群は1970～80年代に盛んに行われた北海道方言調査（小野1983，国立国語研究所1997など）により「新方言」と特定された項目から構成される。[9] 本ニセコ調査では、ちょうど中年層話者（34～59歳）が1970～80年当時の「新方言」の担い手であったと考えられる。

表3　ニセコ調査　語彙・文法アンケートにおける調査項目（A群・B群）の代表例

	A群	B群
語彙項目	トーキビ（とうもろこし）・シバレル（寒い）・コワイ（くたびれた）、など39項目	シャッコイ（つめたい）・メンコイ（かわいい）・バクル（交換する）、など10項目
文法項目	カカサラナイ（（ペンなどが）書けない）・スレ（（勉強）しろ）・タカイバ（（値段が）高いなら）、など20項目	カクベ（書くだろう）・コイバイー（来ればいい）・アッタカイ（暖かい）、など22項目

（各項目の括弧内は共通語形）

語彙A群（伝統的方言語彙）は39項目、語彙B群（新方言的語彙）は10項目、文法A群（伝統的方言文法）は20項目、文法B群（新方言的文法）は22項目、合計91項目を今回の分析対象とする。バリエーションの分析にあたっては、4種類の各項目群（語彙A・語彙B・文法A・文法B）において、回答者が方言的項目を選んだ場合は1点、共通語的項目を選んだ場合は0点を加点し、満点（100%）は91点（語彙A39点、語彙B10点、文法A20点、文法B22点）となる。この割合が高ければ高いほど、（少なくとも意識上は）ことばに方言的色彩が濃いということになる。

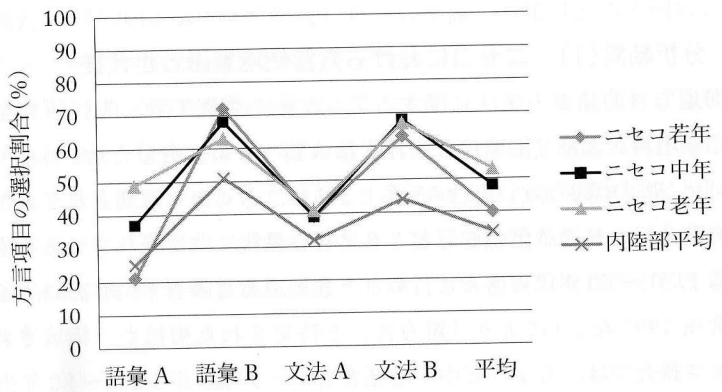

図7　ニセコ町における方言使用意識の世代差と内陸部平均値との比較

図7は、ニセコ町における方言使用(意識)の世代差を示す。また、比較のため筆者が2010年に行った北海道方言的語彙・文法に関する実時間調査(高野2012, 2013)からニセコ町が属すると思われる内陸部方言話者の平均値(若年・中年・老年層)も加えた。図7から北海道内の他の内陸部地域の平均値に比べ、ニセコ町はより方言的だと言える。古方言・新興方言(語彙A, 文法A)に比べ、1970～1980年代に新方言とされた項目(語彙B、文法B)がどの世代でも広まりを見せている。しかし、その世代差は大きなものではない。

ニセコ内の世代間格差は、平均点において予想どおり、老年＞中年＞若年の順でより方言色が薄まるがそれほど顕著なものではない。世代差が最も顕著なのは、古方言・新興方言に属する語彙項目(語彙A)のみであり、同類の文法項目(文法A)においては三世代間の差異は見られない。ニセコ町では全般的に若い世代(中年・若年)へ向けての共通語化はあまり進んでいないと言える。

4.6　分析結果(2)　土着イデオロギーの世代差と個人差の背景

図8～10は、世代別に各協力者の方言的項目の使用(意識)を割合(%)で

示す。

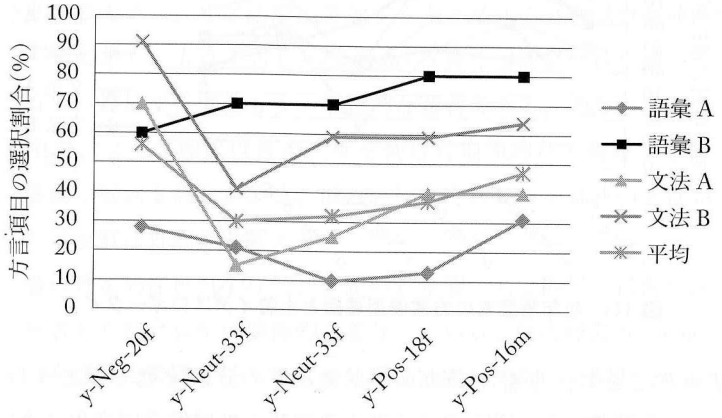

図8　若年層話者の方言使用意識と土着イデオロギータイプ

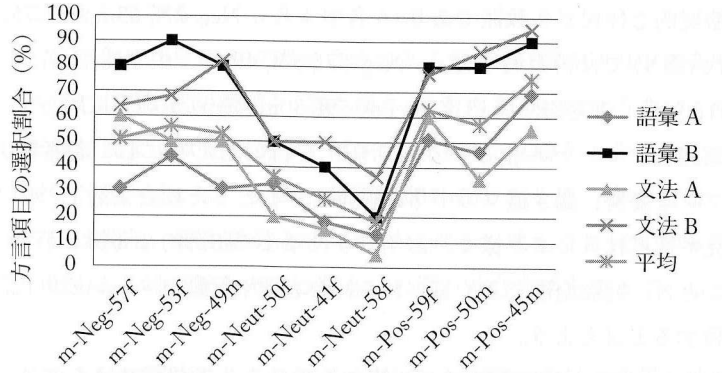

図9　中年層話者の方言使用意識と土着イデオロギータイプ

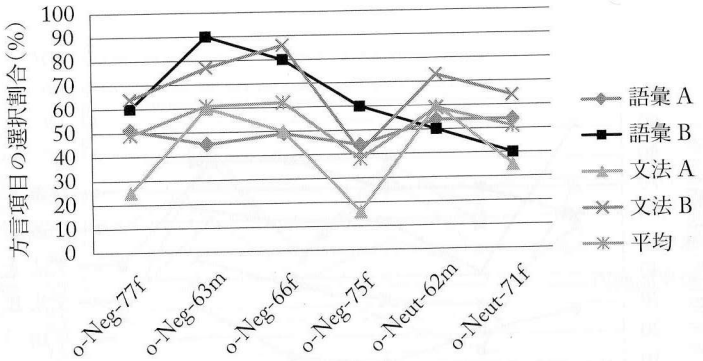

図 10　老年層話者の方言使用意識と土着イデオロギータイプ

まず世代ごとに、土着イデオロギータイプの分散を見てみよう(各表横軸)。若い世代(図 8)では、グローバル化に伴う地域社会の変化に否定的な住民は少なく(5 名中 1 名 y-Neg-20f)、肯定的 2 名(y-pos-18f, 16m)・中立的 2 名(y-Neut-33f, 33f)となっている。対照的に、老年世代(図 10)は否定的または懐疑的な住民が多数派であり(6 名中 4 名 o-Neg-77f, 63m, 66f, 75f)、中年世代(図 9)では否定的(3 名 m-Neg-57f, 53f, 49m)、中立的(3 名 m-Neut-50f, 41f, 58f)、肯定的住民(3 名 m-Pos-59f, 50m, 45m)が均等に散らばっている。急速なグローバル化という生活変化を目の当たりにし、若者は柔軟でオープンな姿勢、働き盛りの中年は職業を中心とした社会生活上の個人差から意見や態度は人により様々、お年寄りは頑なで防御的な姿勢を示す傾向にあることは、社会全般でよく見られる社会心理や行動パターンの世代間格差と一致すると言えよう。

しかし、そのような世代ごとの傾向を受け、各世代内でさらに 1 人 1 人の社会生活や日常のコミュニケーション形態を質的観点からつぶさに分析していくと、個々人が持つ特定イデオロギーの背景(理由)がある程度は説明がつくように思われる。特にグローバル化に対し、肯定的意見を述べる住民には共通して「地元との密度の濃い関わり合い」が挙げられる。また、中立的な立場をとる(または何も意見や感想を表明しなかった)住民にも、社会生活における一定の共通項が見られた。以下で、その詳細を世代ごとに見ていくことにする。

若年層の肯定的住民 1 名(y-pos-18f)は幼い頃から英語が好きで、観光客への道案内のボランティア活動に参加するなど地域の外客誘致関連活動に積極的な若者であり、もう 1 名(y-pos-16m)は長く生徒会役員を務め、クラブ活動で町外へ遠征する機会も多い活動的な若者である。どちらの話者も日常生活の中で、ニセコ住民以外の人々を含む外集団的な広範なコミュニケーション活動に触れる機会が多く、成人と比べそのレンジは狭いとはいえ、社会生活での視野は外向きと言える。

中年層の肯定的住民(図 9)は、上記の若年層二名と同様、日常生活の中で地域に密着した社会活動に積極的に参与している。商店経営者(m-pos-50m)は地元の会議体で役職を持ち外客誘致関連活動に直接的に関わっている。専業主婦(m-pos-59f)はニセコ町民を主体とした NPO 団体の理事として幅広く町の行政にも参画する機会を多く持つ。自営農業主(m-pos-45m)も町内の他の農家と連携して農業祭を企画・運営したり、地元のスポーツ振興活動に積極的に参与している。

グローバル化に否定的な立場が主流である老年層(図 10)の中にあって、グローバル化は「時代の趨勢」「痛し痒し」「町のためには仕方ない」として他の老年層住民よりは比較的オープンで中立的な立場をとる住民が 2 名いた。住民 o-Neut-62m は、多くの自営農家をまとめる連合会の会長、住民 o-Neut-71f は長年、民生委員として町に貢献し、地元では良く知られた人である。どちらも地域社会と関わり合いの深い社会生活を送っていると言える。

一方それとは対照的に、グローバル化に対し明確な意見や感想を持たない住民は、おしなべて地域の変化に比較的無関心か、日常生活の中でそれをほとんど実感していない人々が多かった。若年層の中立的住民 2 名(y-neut-33f, y-neut33f)は両者とも子育てに多忙な専業主婦で、どちらも社会生活の中で直接的に地域の変化を実感することはほとんどないとし、インタビューを通して町の変化に対する意見や感想を述べることはなかった。同様に、立場を明確には述べなかった中年層住民 3 名は、家業である商店経営に携わる女

性(m-Neut-50f)、パートで働く主婦(m-Neut-41f)、専業主婦(m-Neut-58f)などであるが、どの話者もとりたてて地域の社会活動に積極的に関与している住民ではなかった。

最後に、グローバル化に対し否定的な立場をとる住民の意見は人により様々であった。外国人による土地(特に水源)の買い占めや自然破壊に危惧を抱く農業主や農協退職者、「本州からの転入者は本当の北海道(特に厳しい冬)を知らない」とニセコ人気の持続に懐疑的な人々、「知らない人が多くなり、こじんまりした町が住みづらくなった」と不満を述べる人々、グローバル化への町の対応が遅れていて、これ以上の規模の拡大は困難と考える人などがいた。

4.7　分析結果(3)　方言使用意識のバリエーションに見る二つのローカリズム

図8～10からは特定の土着イデオロギータイプと方言使用(意識)割合において、興味深い相関が見られる。過去の類似の研究(Labov 1963など)から概観したように、地域社会の変動に否定的な住民が、郷土への忠誠心や帰属意識から「ローカリズム」を主張する。そのような社会的意味の伝達手段として当該地域に特徴的な言語変項を誇示する傾向は、ニセコのグローバル化に否定的なスタンスをとる話者において(少なくとも方言使用意識上は)一貫して見られる。それは特に図9の中年層3名(m-Neg-57f, m-Neg-53f, m-Neg-49m)の示す高い方言使用(意識)の割合に明確に現れており、若年層1名(図8, y-Neg-20f)、老年層3名(図10, o-Neg-77f, o-Neg-63f, o-Neg-66f)においても類似の傾向が観察される(各図の平均点ラインを参照)。また、ローカリズムを主張する言語的方略は、例えば、古方言や新興方言を再生させるのではなく、比較的新しい方言項目(語彙B、文法B)がその役割を担っていると言える(図8～10)。

一方、図8～10では、過去の研究ではあまり指摘されてこなかった新しい発見もある。ニセコのグローバル化に肯定的なスタンスをとる住民たちにおいても、否定的な住民と同様、地域方言への強い志向性が一貫して観察される。中年層3名(図9, m-Pos-59f, m-Pos-50m, m-Pos-45m)と若年層2名(図8, y-Pos-18f, y-Pos-16m)は、特に高頻度の方言使用(意識)を示す(各平均点ラインを参照)。このことから、地域社会のグローバル化を受容する住民が当該地域方言の衰退(共通語化)を押し進める主体になるわけでは必ずしもなく、むしろ日々変化する地域社会と積極的に向き合い新しい変化と融合する社会生活を送ることで、グローバル化に否定的な住民とは異なる類の「ローカリズム」をかたち作り、地域方言の保持に貢献していると言える。上記のグローバル化に否定的な住民と同様、ここでも比較的新しい方言項目(語彙B、文法B)が活用されている。

最後に、方言使用意識から少なくとも推察できることとして、ことばの共通語化を進める母体は、地域の社会変化に比較的無頓着で拘りがなく、地元で先端的な社会活動に参与する機会をあまり持たないごく一般的な住民である可能性が高い。

4.8　分析結果(4)　自然談話における土着イデオロギーの顕在化

地域の急速なグローバル化に対する住民のローカリズムは、実際の言語運用の中でどのように顕在化するのだろうか。本予備分析では、20名の調査協力者の中でもとりわけ地域のグローバル化に対し否定的なイデオロギーを雄弁に語った話者1名(m-Neg-49m)をケーススタディとして取り上げ、特に音声面におけるバリエーションについて「話題」との相関に着目して分析する。

当該話者(49歳男性・自営農業)は、ニセコ町の農家の長男として生まれ育ち、20代前半に冬の出稼ぎとして数ヶ月を本州で過ごした以外、外住歴はない。家業である農業を継いで四代目となる。ニセコのグローバル化に関しては、特に自然破壊や土地(特に水資源)の買い占めなどに対し強い反対意見を述べていた。

約1時間半に及ぶインタビュー音声を基に、特に以下の変項(1)，(2)の揺れに内在する規則性をインタビュー内容(話題)との関係に着目して検証した(cf., Rickford & McNair-Knox 1994, Schilling-Estes 2004)。

（1）「語頭以外のカ行子音の有声化」（池上他 1977，北海道方言研究会 1978，国立国語研究所 1997）：
ネゴ（猫）・セナガ（背中）・ニセゴ（ニセコ）・言ったゴト（事）に・陰にカグレテ（隠れて）など

（2）「語頭以外のタ行子音の有声化」（池上他 1977，北海道方言研究会 1978，国立国語研究所 1997）：
ハド（鳩）・コドシ（今年）・親がタテデ（建てて）・そんドキ（その時）、など

表 4　49 歳男性自営農主の音声バリエーションと話題の規則的関係

	人物背景	幼少時代	グローバル化意識・態度	農業やりがい・想い	計
カ行有声化	37.5%（3/8）	50%（14/28）	64.4%（29/45）	53.8%（14/26）	56.1%（60/107）
タ行有声化	9.1%（1/11）	17.5%（7/40）	23.7%（9/38）	26.9%（7/26）	20.9%（24/115）

表 4 から全般的にタ行子音（平均 20.9%）よりもカ行子音の有声化（平均 56.1%）の割合が高いのが分かる。インタビュー内では、生い立ちや家族構成などについて尋ねた「人物背景」（図 11, 12: demographic info.）、幼い頃のニセコや学校での出来事・よくした遊びなどについて尋ねた「幼少時代」（childhood）、ニセコのグローバル化に対する個人的意見や感想を尋ねた「グローバル化」（attitude）、自分の仕事（農業）への想いややりがいを尋ねた「農業」（identity）などの話題について語ってもらったが、図 11, 12 から各変項の使用上のバリエーションにはそれらの話題特性との明らかな規則的相関が確認できる。

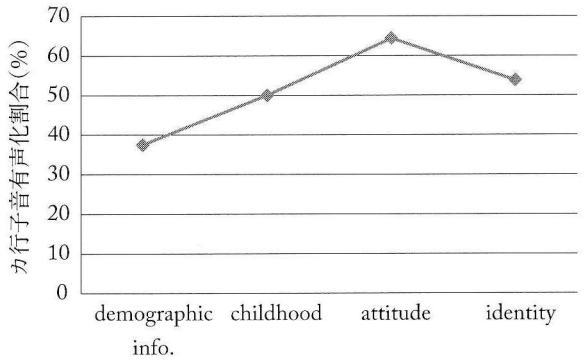

図 11　49 歳男性自営農主の談話音声における語頭以外のカ行子音有声化 x 話題

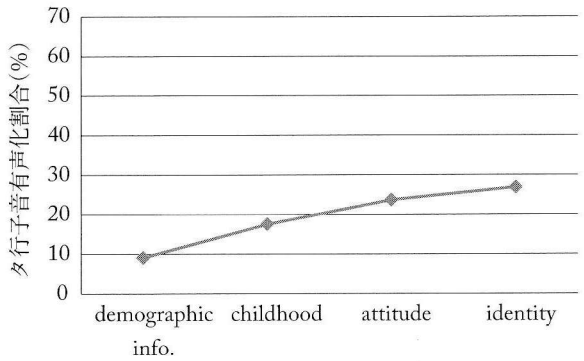

図 12　49 歳男性自営農主の談話音声における語頭以外のタ行子音有声化 x 話題

図 11 から、グローバル化に対する否定的なイデオロギーと関連する話題（attitude）において、当該話者は方言的特徴である「カ行子音の有声化」（64.4%）を最も頻繁に用いていることが分かる。また、社会全般に若者や都会人などから敬遠されがちな農業という仕事への熱い想いややりがいを語る場面（identity）においても、当該変項は高い頻度で用いられている。これらの傾向は、カ行子音に比べ全般的に使用頻度の低い「タ行子音の有声化」においても見られ、どちらの話題においても平均（20%程度）を上回る頻度で用いられている（図 12）。当該話者の生い立ちや家族構成などを尋ねる比較的中立的な話題から、より「日常語」を使うとされるカジュアルな場面（表

4 幼少時代、図 12 childhood）へ話が移るにつれ、どちらの変項の使用においても徐々に頻度が増す。そして、地域のグローバル化への個人的意見を表明したり、農家としての自己の社会的アイデンティティーを主張する場面においては、さらに高い使用頻度を示し、当該話者の話ことばにはより方言的趣が誇示されることになる。

以上のように、インタビュー時における「話題」と密接に関わる規則的変異から、当該音声変項が話者の土着イデオロギーを指標する言語的リソースの１つとして活用されていることは明らかである。これは、先に概説した方言使用意識と土着イデオロギーの相関における相乗的な関係と同様、自然談話という実際の言語運用においても、（おそらく無意識的に）話者は音声という仔細なバリエーションを通して、土着イデオロギーを顕在化させていると言える。

5.　おわりに

急速なグローバル化が進む今日の日本社会において地域方言の共通語化は極めて自然な成り行きと言える。しかし、それとは逆行するかたちで地域の固有性や土着性を誇示・主張するイデオロギーの草の根的な芽生えやそれと密接に関わる地域方言の固持など「ローカリズム復興」の可能性については、これまでのバリエーション研究において本格的な調査は行われてこなかった。急速なグローバル化が進む地域社会（ニセコ）をフィールドにした今回の調査結果から、予備的分析の段階ではあるが、住民たちの言語意識や実際の言語運用における「ローカリズム」の現れとそれと相乗的関係にある地域方言保持の可能性は経験的に立証できたのではないかと考える。

また、本調査では、従来のバリエーション研究における諸調査方法論を積極的に融合し適宜活用した。具体的には、「方言使用意識」（語彙・文法アンケート調査）や実際の談話データ（インタビュー）など言語運用に関わる異なる次元からのデータの収集、さらには、インタビューの中で垣間見られる住民の意識や態度の有り様に注目する「質的洞察」を分析に組み込むことで、

ことばのバリエーションが持つ「社会的意味」を探究する試みを紹介した。

今後の研究の展開として、言うまでもないが、より調査規模を拡大し、今回の検証で明らかになった話者の土着イデオロギー（肯定・否定・中立）と言語使用上のバリエーションの相関が、地域社会全体の中にどのように埋め込まれ、当該方言全般の変化とどのように結びついているのかを見極めることが重要課題となる。また、分析方法論に関しても、音声のみならず語彙・文法・談話など言語の諸側面に目を向け、頻度の高・低に関わらず、土着イデオロギーを伝達する手段となるような変項の特定を注意深く継続すべきである。分析用データに関しても、アンケート調査による方言使用意識や調査者によるインタビュー談話のみならず、友人間や家族間会話など内集団的場面における言語運用の個人内変異（スタイル）を観察し、多元的視点から土着イデオロギーの発現を見極めるべきである。

注

1　こうして成立した理論的枠組みは、「変異理論」「バリエーション理論」「バリエーション言語学」などと称される。

2　本調査は、文部科学省科学研究費・挑戦的萌芽研究（No. 21652040）『急速なグローバリゼーションによる地域方言の変容と話者心理に関する社会言語学的研究』（2009 年～ 2011 年度　研究代表者　高野照司）からの助成を受け行われている。

3　本章における「グローバル化」は、類似概念である「国際化」と対比して、住民の生活実態と深い関わりを持った、より草の根的で、私的かつ庶民的な社会変化として捉えておく。また、外国人との交流のみならず、国内の異文化や他地域住民との日常生活上必要とされる交流や行き来を含む。

4　ニセコ町に隣接する倶知安町では、1959 年（昭和 34 年）、国立国語研究所（1965）が徳島県から入植した一戸の農家を対象に 3 世代（1 ～ 3 世）にわたる言語の移り変わりを調査した。その結果、倶知安町のみならず他の道内調査地点においても、入植第二世代では親の出身地の方言的特徴がいくらか見られるが、第三世代では親や祖父母の影響はほとんど受けず、道内のどこの地域でも似通った北海道方言が話されていることが分かった。

5　「土着イデオロギー」とは、話者が生まれ育った郷土に向ける愛着・帰属意識・

忠誠心・誇りなどを含めた包括的な概念として定義しておく。

6 一方、グローバル化の進む地域社会における土着イデオロギーとことばのバリエーションの密接な関係は、方言の変容のみならず、バイリンガル社会における言語シフト事象でも確認されている。1970年代、オーストリアとハンガリーの国境の町Oberwartでは、地域社会全般で進行しつつあるドイツ語への漸次的シフトが、地域に伝統的な農業主体の生活を嫌う女性たちが主体となって推進されていた(Gal 1978)。新規産業の参入によって近代化する当該地域社会において、新時代の女性の社会的役割の象徴としてドイツ語が機能していたと言える。上記のマーサズ・ビンヤード島は、島社会の変化を嫌い地域の伝統的な生活様式や価値観を志向する土着イデオロギーが、島特有の方言的特徴を固持する方向へと言語変化を進めた事例であり、一方Oberwartは、地域社会の変化を積極的に受け入れ地域固有の古い価値観を否定する土着イデオロギーが、地域の二言語併用パターンにおける反土着的な方向付けを強化していった事例と言える。方向性(土着語化と反土着語化)は異なるものの、どちらの事例においても、話者(または言語共同体全体)の持つ土着イデオロギーがことばのバリエーション・変化と「正の相関」を示している事例だと言える。

7 「日常語」とは、私たちが言語形成期(おおよそ、小・中学校時代)に獲得すると言われる、自然で無意識的なことば遣いのことである。日常語は、様々なことばのスタイルの中で最も安定した規則的な体系であることがわかっており、ことばのバリエーション分析には良質のデータを提供してくれると考えられる(Labov 1966)。しかし、調査という人工的な場面で、普段のなにげない場面で用いられるような話者の日常語を採取することは決して容易ではなく(「観察者のジレンマ」)、通常、調査者(インタビューアー)は話す題材(話題)の調整を柔軟に行いながら、話者が自分のことば遣いに意識を向けずに「素の自分」が出たことば遣いを採取しようと努める。一般に、子供の頃にした遊びや喧嘩、死ぬかと思った時の出来事などは日常語を採取するには効果的だと言われる(Labov 2006)。

8 古方言は、古くからの方言形で今では衰退してしまい老年層にわずかに残るもの。中興方言は、一度若い世代で増え始めたが、新方言や共通語形が台頭したため勢力が尻すぼみになったもの(井上 1983)。

9 「新方言」とは、「若い世代において、新たに発生し、又は勢力をひろげつつある非標準語形で、地元でも方言扱いされているもの」である(井上 1983: 5)。

参考文献

Bell, A. (1984) Language style as audience design. *Language in Society*, 13: 145–204.

Bell, A. (2001) Back in style: reworking audience design. In P. Eckert & J. Rickford (eds.), *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.139–169.

Biber, D., & Finegan, E. (eds.) (1994) *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford: Oxford University Press.

Cedergren, H. J., & Sankoff, D. (1974) Variable rules: performance as a statistical reflectionof competence. *Language*, 50: 333–355.

Chambers, J. K. (1992) Dialect Acquisition. *Language* 68(4): 673–705.

Chambers, J. K. (2009) *Sociolinguistic Theory* (Revised Edition). Oxford: Wiley-Blackwell.

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Coates, J., & Cameron, D. (eds.) (1988) *Women in Their Speech Communities*. London: Longman.

Coupland, N. (2001a) Dialect stylization in radio talk. *Language in Society* 30: 345–375.

Coupland, N. (2001b) Language, situation, and the relational self: theorizing dialect-style in sociolinguistics. In P. Eckert & J. Rickford (eds.), *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.185–210.

Duranti, A., & Goodwin, C. (eds.) (1992) *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press.

Eckert, P. (1988) Adolescent social structure and the spread of linguistic change. *Language in Society*, 17: 183–207.

Eckert, P. (1991) Social polarization and the choice of linguistic variants. In P. Eckert (ed.), *New Ways of Analyzing Sound Change*. New York: Academic Press. pp.213–232.

Eckert, P. (1997) Age as a sociolinguistic variable. In F. Coulmas (ed.), *The Handbook of Sociolinguistics*. Oxford: Blackwell. pp.151–167.

Eckert, P. (2000) *Linguistic Variation as Social Practice*. Malden, MA: Blackwell.

Eckert, P. (2005) *Variation, convention, and social meaning*. Paper presented at the Annual Meeting of the Linguistic Society of America. Oakland, California.

Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (1992) Think practically and look locally: language and gender as community-based practice. *Annual Reviews of Anthropology*, 21: 461–490.

Eckert, P., & Rickford, J. (eds.) (2001) *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fought, C. (2002) Ethnicity. In J. K. Chambers, P. Trudgill, N. Schilling-Estes (eds.), *The Handbook of Language Variation and Change*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.444–472.

Foulkes, P. (2005) The Social Life of Phonetics and Phonology. Plenary address at the 5th UK Language Variation and Change Conference, University of Aberdeen.

Foulkes, P., & Docherty, G. (2006) The social life of phonetics and phonology. *Journal of Phonetics* 34: 409–438.

Gal, S. (1978) Peasant men can't get wives: Language change and sex roles in a bilingual

community. *Language in Society* 7: 1–16.
Giles, H., & Coupland, N. (1991) *Language: Contexts and Consequences*. Buckingham: Open University Press.
Graddol, D., & Swann, J. (1989) *Gender Voices*. Oxford: Blackwell.
Gumperz, J. J. (1982a) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
Gumperz, J. J. (ed.) (1982b) *Language and Social Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
Guy, G. (1980) Variation in the group and the individual: the case of final stop deletion. In W. Labov (ed.), *Locating Language in the Time and Space*. New York: Academic Press. pp.1–36.
Guy, G. (1991) Explanation in variable phonology: an exponential model of morphological constraints. *Language Variation and Change*, 3: 1–22.
Guy, G. R., & Boberg, C. (1997) Inherent variability and obligatory contour principle. *Language Variation and Change*, 9: 149–164.
Habick, T. (1991) Burnouts versus Rednecks: Effects of group membership on the phonemic system. In P. Eckert (ed.), *New Ways of Analyzing Sound Change*. New York: Academic Press. pp.185–212.
北海道方言研究会(1978)『共通語化の実態—北海道増毛町における3地点全数調査』北海印刷
北海道貿易情報センター(2006)「ニセコ地域における外国人の観光と投資状況に関する報告書(要約)」2006年1月
北海道新聞社(2011年2月15日)「人口急減予測超え」朝刊3頁
Hymes, D. (1974) *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
池上二良・五十嵐三郎・柴田武・岡本次郎・小野米一・大山信義・井上史雄(1977)『北海道浜ことばの共通語化に関する計量社会言語学的研究』昭和51・52年度文部省科学研究費(総合A)研究報告書
井上史雄(1985)『新しい日本語—《新方言》の分布と変化』明治書院
井上史雄(編)(1983)『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究—東京・首都圏・山形・北海道』昭和57年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書
陣内正敬(1996)『地方中核都市方言の行方』おうふう
Johnstone, B. (2004) Place, globalization, and linguistic variation. In C. Fought (ed.), *Sociolinguistic Variation: Critical Reflections*. Oxford: Oxford University Press. pp.65–83.
Kerswill, P., & Willliams, A. (2000) Creating a New Town koine: Children and language change in Milton Keynes. *Language in Society* 29: 65–115.

国立国語研究所(1965)『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』国研報告書27
国立国語研究所(1997)『北海道における共通語化と言語生活の実態(中間報告)』調査報告書国立国語研究所
Kroch, A., & Small, C. (1978) Grammatical ideology and its effect on speech. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. pp.45–55.
Labov, W. (1963) The social motivation of a sound change. *Word*, 19: 273–309.
Labov, W. (1966) *The Social Stratification of English in New York City*. Arlington, VA: Center for Applied Linguistics.
Labov, W. (1969) Contraction, deletion and inherent variability of the English copula. *Language*, 45(4): 715–62.
Labov, W. (1972a) *Sociolinguistic Paterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
Labov, W. (1972b) Some principles of linguistic methodology. *Language in Society*, 1: 97–120.
Labov, W. (2006) *The Social Stratification of English in New York City (Second Edition)*, Cambridge: Cambridge University Press.
Le Page, R., & Tabouret-Keller, A. (1985) *Acts of Identity: Creole-based Approaches to Language and Ethnicity*. Cambridge: Cambridge University Press.
ロング・ダニエル(1990)「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」『国語学』162
Meyerhoff, M., & Niedzielski, N. (2003) The globalisation of vernacular variation. *Journal of Sociolinguistics* 7(4): 534–555.
Milroy, L. (1980) *Language and Social Networks*. Cambridge, MA: Blackwell.
Milroy, L. (2004) Language ideologies and linguistic change. In Carmen Fought (ed.), *Sociolinguistic Variation: Critical Reflections*. New York: Oxford University Press. 161–177.
永瀬治郎(1984)「都会の方言—東京」『国文学解釈と鑑賞』5月臨時増刊号143–157頁
ニセコ町企画課(2007)『広報ニセコ』2月号(No. 538)
ニセコ町(2009)『数字で見るNISEKO』ニセコ町統計資料2009年5月末版
ニセコ町百年史編さん委員会(編)(2002)『ニセコ町百年史』ぎょうせい
小野米一(1983)「北海道の《新方言》事象」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究—東京・首都圏・山形・北海道』昭和57年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書
Payne, A. (1980) Factors controlling the acquisition of the Philadelphia dialect by out-of-state children. In W. Labov (ed.), *Locating Language in Time and Space*. New York:

Academic Press. pp.143–178.

Podesva, R. (2006) *Phonetic Detail in Sociolinguistic Variation: Its Linguistic Significance and Role in the Construction of Social Meaning*. Unpublished Ph. D. dissertation, Stanford University.

Prince, A., & Smolensky, P. (1993) Optimality theory: Constraint interaction in generative grammar. Manuscript, Rutgers University and University of Colorado at Boulder.

Rampton, B. (1995) *Crossing: Language and Ethnicity Among Adolescents*. New York: Longman.

Rickford, J., & McNair-Knox, F. (1994) Addressee-and topic-influenced style shift: A quantitative sociolinguistic study. In D. Biber & E. Finegan (eds.), *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford: Oxford University Press. pp.235–276.

Roberts, J., & Labov, W. (1995) Learning to talk Philadelphian: Acquisition of short a by preschool children. *Language Variation and Change* 7: 101–12.

真田信治(1988)「方言意識と方言使用の動態—中京圏における」国立国語研究所編『方言研究法の探究』秀英社出版 41–80 頁

真田信治(2000)『脱・標準語の時代』小学館文庫

Sankoff, D. (1988) Sociolinguistics and syntactic variation. In F. J. Newmeyer (ed.), *Linguistics: The Cambridge Survey*, vol. 4：*The Socio-Cultural Context*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.140–161.

Sankoff, D., & Labov, W. (1979) On the uses of variable rules. *Language in Society*, 8: 189–222.

Sankoff, D., & Laberge, S. (1978) The linguistic market and the statistical explanation of variability. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. pp.239–250.

Schilling-Estes, N. (2004) Constructing ethnicity in interaction. *Journal of Sociolinguistics* 8 (2): 163–195.

徳川宗賢・真田信治(編)(1991)『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社

高野照司(2012)第 2 章「時間からことばの変化をさぐる」日比谷潤子編著『はじめて学ぶ社会言語学』ミネルヴァ書房 32–53 頁

高野照司(2013)「北海道方言の共通語化・新方言の半世紀後の様相—実時間トレンド調査による検証—」『北海道方言研究会会報』第 89 号 76–91 頁

Underwood, G. N. (1988) Accent and identity. In A. R. Thomas (ed.), *Methods in Dialectology: Proceedings of the 6th International Conference*. Multilingual Matters. pp.406–427.

Weinreich, U., Labov, W., & Herzog, M. I. (1968) Empirical foundations for a theory of language change. In W. P. Lehmann and Y. Malkiel (eds.), *Directions for Historical Linguistics*. Austin, TX: University of Texas Press. pp.95–188.

Wolfson, N., Marmor, T., & Jones, S. (1989) Problems in the comparison of speech acts across cultures. In S. Blum-Kulka, J. House and G. Kasper (eds.), *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex. pp.174–196.